



10月4日(土)・5日(日)に本学大学祭である伍桃祭(ごとうさい)が行われました。今回はエコロジーを意識した企画(フリーマーケット、リユース容器の使用、マイ箸運動など)を行い、地域の方々にも好評をいただくイベントとなりました。



● 学長・国際交流委員長対談

● 暮らしサイエンス

・古くて新しい感染症：インフルエンザ

● 第8回新潟医療福祉学会学術大会の開催報告

● 院生研究紹介

・上肢把持型振動刺激装置使用時の肩関節周囲筋の筋活動に関する研究
・運動と食事が糖代謝能力に及ぼす影響

● 平成20年度「総合ゼミ」発表会報告

● 学外実習体験記

理学療法学科／作業療法学科／言語聴覚学科
義肢装具自立支援学科／健康栄養学科／健康スポーツ学科
看護学科／社会福祉学科

● 強化クラブ紹介

サッカー部(男子チーム・女子部員)／男女バスケットボール部
水泳部／陸上競技部(駅伝チーム)

● CAMPUS NEWS ● 第8回伍桃祭報告

● 同窓会 ● 受験生のみなさんへ

今回は、本学における国際交流の目的や現状、展望などについて、高橋学長と国際交流委員長の伊藤教授に対談していただきました。

学長:日本は高齢化社会ですが、韓国や中国などは日本よりも急速に高齢化社会に向かっており、日本の医療福祉の良いところを取り入れているそうです。日本人にとって従来の国際交流は、知識や技術の吸収が目的でした。しかし現在、医療福祉の分野において日本は世界に発信する立場にあるのです。そこで私は、本学が「大きな発信能力をつけるべき」と考えています。私は開学時に本学の理念のひとつとして国際社会への貢献を掲げました。そのためにまず学生には、自分の考えを表現できる英語力を身に付けて欲しい。そして教員も発信能力

内なども務めました。日常会話はインドネシア語。仕事は全て英語です。世界中どこでも英語の使い手はいる。海外で情報処理技術と英語を使えないと損ですね。英語を勉強すれば、活動の場が世界に広がります。

学長:同感です。できれば低学年のうちに英語学習能力を早くつけて欲しい。そのきっかけづくりが海外学術交流や海外研修です。今年度のこれまでの実績としては、看護学科主催の「ロシアハバロフスク極東大学との交流事業」、理学療法学科主催「南オーストラリア大学への海外研修」、「空飛ぶ車いす」事業への義肢装具自立支援学科学生の



参加などがありました。他にも年度内に多くの海外研修を予定しています。

伊藤:私はWHOやJICAにもおりましたが、JICAではインドネシアの保健省で日本の政府開発援助の手伝いをしていました。主に携わったのは「母子保健(手帳)プロジェクト」です。インドネシアでは乳児死亡率が高いことから、日本で有益に活用されている母子手帳のインドネシア版の開発が始まったのです。新プロジェクトの開発や、スマトラ沖地震においての日本との連絡調整や案



の参加などがありました。他にも年度内に多くの海外研修を予定しています。

伊藤:海外研修に参加した学生からの反応は大変よく、「障害によって困難を感じている患者さんの姿は万国

共通。援助する者の立場や方法は違っても、その思いは我々と同じだった」、「他国の医療職養成制度の状況などを学べた」、「アメリカの学生は実に積極的。大いに反省した」、「挑戦し続ける姿勢を学んだ」、「英語である程度意思疎通ができ、自信がついた」などの感想が寄せられています。いずれにせよ若い時のこういう体験は、何物にも代えがたいものです。

学長:それには親御さんの理解も必要です。私は保護者会のあるときに、「こどもに新車を買う余裕があればぜひ中古にして、余剰金で一生の財産となりうる能力を付与する機会を与えて欲しい」と、つねに親御さんにもお願いしています。専門知識と語学力がつけば将来大きく発展できる。そのための投資は、こどもへの最大のプレゼントです。そこから新しい世界が開けます。

伊藤:学生の海外研修は最近非常に活発ですが、語学留学をステップに専門領域において海外で活躍できる人をたくさん輩出したいですね。

学長:私は本学にしかできない国際交流、国際貢献の形があると思います。たとえば



新潟医療福祉大学
学長
高橋 榮明



理学療法学科教授
国際交流委員長
伊藤 隆

平成21年秋に、JICAの依頼で南太平洋地域の9カ国から看護師が研修で本学を訪問する予定です。その国々では肥満が大きな問題になっているそうですが、我々ならば保健医療福祉の総合大学の強みを活かし、栄養指導や運動指導を組み合わせた研修モデルのプランニングが可能です。我々の能力を提供し、外国語も使える専門職者の育成など、今までにない21世紀の国際交流によって、本学の魅力を世界に発信していきたいと考えています。

伊藤:その実現に向けて、国際交流委員会では国際交流活動の中身を研究・教育の両面で充実させるために、現在様々な制度の検討も行っております。また、現在留学生の受け入れ体制の整備もすすめています。

学長:そうですね。国際交流活動を通じて世界に貢献するためにも、ぜひこれからも活動内容の整備を進めてください。

JICA…独立行政法人国際協力機構
WHO…世界保健機関

今年度の海外学術交流・研修旅行 【実績】(4月~12月実施)

「ロシアハバロフスク極東大学との交流事業」
(看護学科主催)

「南オーストラリア大学への海外研修」
(理学療法学科主催)

「空飛ぶ車いす事業への参加」
(義肢装具自立支援学科主催)

「連携教育国際ミニシンポジウム」開催

【予定】(2月~3月予定)

「ピッツバーグ大学への海外研修」
(義肢装具自立支援学科主催)

「アメリカ研修(カリフォルニア州立大学フレズノ校訪問)」
「アジア研修(フィリピンでの大学等訪問)」
(理学療法学科主催)

「UCLA大学病院等訪問」
(看護学科主催)

「メイン大学語学研修」
「韓国忠南大学語学研修」
(英語科主催)

古くて新しい感染症：インフルエンザ

健康栄養学科 教授 遠藤 和男

「インフルエンザ」を知らない人はまずいないでしょう！では語源はご存じでしょうか？ 英語で“*Influenza*”は“*influence*”を語源とし、「影響する」という意味です。中世イタリアの占星術師が星回りの「影響」と考えたのが語源ですが、人類に〔多大なる脅威を与えてきた感染症〕なのです。例えば、日本人の平均寿命（女性はいまだに第1位、男性は第3位になったと言われる）も順調に直線的に伸びてきたわけではなく、平成7年の阪神・淡路大震災の時は例外として、これまで何回か停滞したり、前年を下回ったりしたのは、インフルエンザ流行による影響と言われています。

インフルエンザは、「流行性感冒」いわゆる〔流感〕と呼ばれ、病原体であるウイルスが分離されたのは、1933年のことですが、いまだに“単なる風邪”の重篤なものや、インフルエンザ菌によると誤解されているようです。いわゆる“風邪”も医学的には〔ウイルスによる上気道感染症〕と定義され、さまざまなウイルスを原因として起こります。例えば、「今年の風邪は下痢を伴うのが特徴だよ。」などと言う時には、下痢が治ったら微熱も下がったなどという場合も多いものです。

しかしながら、インフルエンザを特徴づけるのは、微熱などは言えない急激な発熱です。38℃以上の熱発と、頭痛、全身倦怠感、筋肉痛・関節痛などの全身症状が強烈であり、通常の風邪でも見られる咳、鼻汁などの上気道炎症はいわば付随的症状なのです。かくいう私も高3の晩秋に40℃以上の発熱を経験し、寝ていて天井が普段の倍以上も遠くに感じるという経験をしました。小児ではこのまま脳症に至ったり、老人では肺炎を併発したりで、毎年数百～千名超の死亡が認められています。したがって前述のように流行年には平均寿命にまで影響を与えることになります。

医学の発達した今日ワクチンがあるではないか？と多くの方が思われるでしょう。ごもっともなのですが、まずこれまでに大流行を起こした事例を表1に示しました。表中に示したH、Nの型については図をご覧ください。インフルエンザウイルスはヘマグルチニン（H）とノイラミダーゼ（N）という2つのスパイクを持っています。前者Hスパイクはヒト細胞への侵入、後者Nスパイクは細胞からの放出という役割を担っています。しかも「敵もさるもの」であり、数十年から十数年単位で両スパイクの型を変えており（変異と呼ぶ）、これが表1に示した大流行の原因です。世界的には毎年のように小変異を繰り返しているのです。

それでは、「今までに知られているH、N両スパイク型すべてに対応するワクチンを作ればよいではないか？」という疑問も当然であり、理論的には可能かも知れません。しかしながら、現実的には不可能なのです。なぜなら抗体も蛋白質であり、ワクチン液として注射するには、2～3種類を混合するのがせいぜいです。それ以上は液剤に混入できないのが技術上の泣き所です。もちろんワクチン製作会社は、過去の流行株から予測してワクチンを作っていますが、実際に流行株からワクチンを作成するには2か月以上かかりますから、そのうち流行は終わってしまいます。

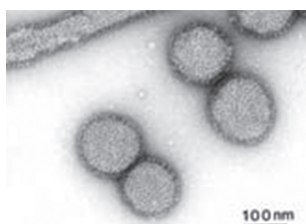
またしても、「ワクチンなんて無意味なのでは？」という疑問が残ります。しかし、毎年の小変異株に対しては交叉免疫と呼ばれている効果のため、少なくとも80%は有効であるとか、他人への感染力は抑制できるとの報告があります。また、約三分の二に免疫（過去の感染経験を含む）があれば、大流行は防止できるとの報告もあり、まったく免疫がない集団であっても80%強が予防接種を受ければ、大丈夫という次第です。決して予防接種が無効なわけではありません。ただし、以上はこれまでの事態についてであり、今や世界中が新たに重大な問題に直面しているのです。

そのとおり！いわゆる「鳥インフルエンザ」の出現です。宮崎県の東宮原知事が昨年、就任早々に振り回されて話題となりました。トリが小変異のみならず、大変異の原因だったというわけです。タイプはH5N1と言われ、日本ではまだヒト⇒ヒトへの事例は認められていませんが、表2に示したように死亡例が確認された国もあり、致命率（発症数に対する死亡数の率）が高いことに驚かれると思います。WHO（世界保健機関）も「フェーズ3（フェーズ6が大流行）」の警告を発し、日本でも今年5月の法改正により、これまでの暫定的な〔指定〕から〔2類〕感染症へと格上げしました。

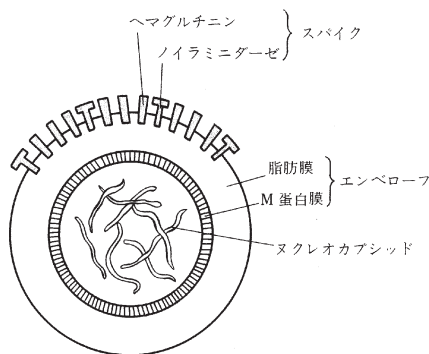
本学でも、今年も希望者へのインフルエンザ予防接種を行いました。諸外国では、自分とはもかく患者さんなどにうつさないために、医療関係者等には予防接種が義務づけられています。新聞等でご存じかも知れませんが、政府も新型に対するワクチン接種は医療関係者等を優先するという計画を立てております。「たかがインフルエンザ、されど」です。現在新型に対するワクチン開発も進み、抗ウイルス薬の備蓄も開始されました。旧株に対しては免疫のある私自身も、今年は接種を受けました。もちろん私自身というより、学生さんへの“*influence*”を配慮してのことです。（学校医）

表1. 20世紀以降のインフルエンザ流行

流行名	初発年	型	H、N型	日本における推定死亡者数
スペインかぜ	1918	A	H1N1	約40万人
アジアかぜ	1957	A	H2N2	5,700人
香港かぜ	1968	A	H3N2	2,000人
ソ連かぜ	1977	A	H1N1	青年層のみ？



インフルエンザウイルスの電子顕微鏡像



出典：「総合衛生公衆衛生学 改訂第2版 上巻」P727 南江堂（東京）1985

インフルエンザ・ウイルス粒子の構造模型図

表2. WHOに報告された鳥インフルエンザ確定例

(厚生労働省発表、2008年9月10日現在)

初発年	国名	累積発症数	累積死亡数
2003	中国	30	20
	ベトナム	106	52
2004	タイ	25	17
	カンボジア	7	7
2005	インドネシア	137	112
	アゼルバイジャン	8	5
2006	ジブチ	1	0
	エジプト	50	22
2007	イラク	3	2
	トルコ	12	4
2008	ラオス	2	2
	ミャンマー	1	0
2008	ナイジェリア	1	1
	パキスタン	3	1
2008	バングラデシュ	1	0
累計		387	245

第8回新潟医療福祉学会学術大会の開催報告

第8回学術大会実行委員長 阿部 薫
(義肢装具自立支援学科 准教授)



学会会場の様子(特別講演)

プログラム

- 9:30～ 9:45 学会会頭挨拶
- 9:45～11:45 一般演題：口演
- 12:15～12:45 新潟医療福祉学会総会
- 12:45～13:15 一般演題：示説
- 12:45～13:15 一般演題：口演
- 13:45～14:45 特別講演 日本大学大学院 宮本晃先生
「宇宙医学と宇宙飛行士の健康管理」
- 14:45～15:45 専門セッション
(義肢装具・福祉機器・福祉住環境)

1 学術大会開催までの不安と期待

10月25日(土)、本学にて第8回新潟医療福祉学会学術大会が開催されました。本学会は、2001年に新潟医療福祉大学の開学と新潟リハビリテーション病院が開設されたことを記念して設立され、毎年学術大会が開催されており、今大会で第8回を迎えました。

毎年の学術大会は本学の8つの学科が順番に担当することになっており、今回は義肢装具自立支援学科が担当しました。昨年度は看護学科担当のもと、第7回大会が盛大に開催され、その準備段階の完璧さやスタッフの糸乱れぬ行動とスケジュール管理にはただ脱帽するばかりでした。そして果たして我々が担当する第8回大会は、こんなに盛大にできるだろうかと不安になったものでした。義肢装具自立支援学科の教員は小チームであり、大半が関東出身で地元にはコネクションもなく、2007年に学科が開設されたばかりと不利な条件を鑑みるに、答えは「自分たちにできる範囲でがんばろう」と一つに集約されました。

幸いにして当学科には心強い支援チームがあります。毎月のように開催されるキャンパスツアーやオープンキャンパスなどのイベント運営で鍛えられた学生たちの存在です。在学生は1年生と2年生しかおりませんが、5月に仙台で開催された日本義肢装具士協会学術大会に、ほぼ全員が参加しているため学会というもの知っており、また8月に朱鷺メッセで行なわれた全国規模の学会である、「リハ工学カンファレンス」の運営スタッフとして奮迅の働きを経験していることもあり、運営面に関しては密かな自信がありました。

2 学術大会は大盛会

さて学術大会の内容です。宮本晃先生(日本大学大学院教授)による特別講演「宇宙医学と宇宙飛行士の健康管理」が行なわれました。宮本先生は日本人宇宙飛行士第1号の医学選抜から主導的に関与され、これまで経験されてきた宇宙医学の世界から宇宙開発



特別講演の宮本晃先生

の裏話まで、とても楽しい1時間でした。またシンポジウム「義肢装具自立支援とは何か」では、義肢装具自立支援学科の学生が将来活躍することが想定される分野の専門家6名による講演が行なわれました。学術発表では、一般演題10、ポスター演題29の研究成果が発表され、学外に対しても本学における各学部・各学科

の連携を示すことができました。参加者(受付数)は学内(教員・院生・学部)59名、学外(非会員・来賓・卒業生・保護者など)55名、スタッフ(学科教員・学生)50名の計164名でした。また同日には新潟医療福祉学会総会、同窓会総会も開催されました。

3 学術大会ウラ話

本稿のような報告文には、収支面についての言及を通常はしないものですが、ここで少し紹介することにしましょう。実際に学術大会を運営することになって、どれぐらいの資金が必要なのかは実行委員会にとって重大な関心事です。他学会でも学術大会は学会本体から切り離された独立会計である場合が多く、本大会も独立会計からです。昨年度の収支報告を見ると、学会からの助成金だけでは当然不足しており、自助努力による資金調達は必至であることがわかりました。まずは経費節約です。学科や教員個人のもので使えるものは可能な限り供出してもらい、抄録集(今回から新潟医療福祉学会誌8巻1号の学術大会特集号となった)の印刷費や、どうしても購入しなければならないものに限って切り詰めて支出するようにしました。また広告収入が主たる資金源になるので、あらゆるルートでお願いし、多くのご協力を賜ることができました。

4 さいごに

来年も同時期に作業療法学科の大山学科長が大会長となり、第9回学術集会が開催企画されています。ご協力いただきました各位には、紙面をお借りして心から深謝申し上げます。ありがとうございました。



シンポジストに感謝状が贈呈されました

上肢把持型振動刺激装置使用時の肩関節周囲筋の筋活動に関する研究

新潟医療福祉大学大学院 保健学専攻(修士課程2年) 理学療法学分野(新潟リハビリテーション病院) 理学療法士 岡邨直人

近年、運動能力や固有感覚の低下に対して、また高齢者の運動機能向上や転倒予防の新しいトレーニング方法として全身振動刺激トレーニングが注目されています。全身振動刺激トレーニングとは、筋の緊張性振動反射を用いて、筋収縮を高頻度で反復学習させるトレーニング方法です。振動刺激装置には、全身振動刺激装置と上肢把持型振動刺激装置(以下、上肢ガリレオ:図1)があります。私は大学院の研究で上肢ガリレオを用いて、上肢の肢位と振動周波数を変化させた時の肩関節周囲筋の筋活動量を明らかにすることを目的に研究を行っています。

健康成人に対して、表面筋電図解析装置を用いて、(1)端座位、肘関節90°屈曲位、(2)端座位、肩関節90°屈曲位、(3)背臥位、肩肘関節90°屈曲位、(4)背臥位、肩肘関節60°屈曲位の4課題を行ってもらいました。筋電図導出は、右側の上腕二頭筋、上腕三頭筋、三角筋(前部・中部・後部線維)とし、振動周波数は振動なし、10Hz、20Hz、30Hzの4条件としました。

その結果は、すべての筋および肢位において、振動なし・10Hz・20Hzに比べ、30Hzで有意に大きな値を示しました(図2:代表例とし

て三角筋前部線維の筋活動量を示しています)。肩関節90°屈曲位保持の三角筋前部・中部線維では、30Hzで、最大筋力の50~60%という筋活動量がみられました。また、すべての筋において、振動なしの筋活動量に対して、30Hzでは1.5~4倍の筋活動量がみられました。

結果より、30Hzでは、振動なし・10Hz・20Hzに比べ大きな筋活動量がみられました。これは実際に上肢ガリレオを把持した際の筋活動に加え、振動刺激により筋に反射性収縮が発生しているため、筋活動量が増加したと考えられます。また、肩関節90°屈曲位の三角筋前部・中部線維で、最大筋力の50~60%という筋活動量が得られ、筋力増強の効果が期待されると考えられます。

以上のことから、上肢ガリレオを使用してトレーニングを行なうことで、大きな筋活動量が得られることがわかりました。この研究から、高齢者およびスポーツ選手のトレーニング、臨床場面におけるリハビリテーションへの応用など、様々な分野へのトレーニング効果が期待されると思われます。

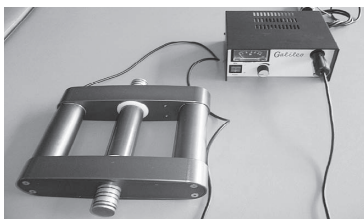
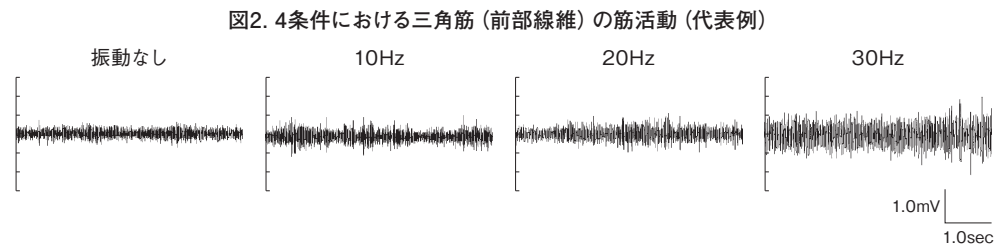


図1. 上肢把持型振動刺激装置



運動と食事が糖代謝能力に及ぼす影響

新潟医療福祉大学大学院 保健学専攻(修士課程2年) 健康栄養学分野 保苅英美

健康栄養学分野の川中ゼミでは、博士後期課程1名、修士課程2名、卒業研究4名の計7名の学生が在籍しています。このゼミでは、運動と食事による健康づくりを念頭に、実験動物を用いて研究をしています。

近年増加を続ける糖尿病は、動脈硬化や心血管疾患につながるため、早期発見、早期治療が必要とされ、メタボリックシンドロームの診断基準のひとつには血糖値が含まれています。骨格筋は血糖の約80%を代謝しているため、骨格筋における糖の代謝能力の低下は糖尿病の原因となります。血糖はインスリンの作用によって骨格筋などの器官に取り込まれますが、インスリンの効き目が悪くなると血糖が骨格筋に取り込まれにくくなり、血糖値が上昇したままになってしまいます。インスリンの効き目が悪くなることをインスリン抵抗性と言います。

我々の研究室ではインスリン抵抗性を改善するメカニズムを探索しています。それには、「運動が骨格筋糖代謝に及ぼす影響とその機序」、「骨格筋の糖代謝機能を高める食品素材の探索」、「肥満にともなう食欲調節機能の異常と運動による改善の可能性」についての研究が必要となります。そして、最終的にはインスリン抵抗性を改善するための、新たな運動処方や食事療法を示していくことを目標に研究しています。

ところで、このゼミでは研究活動の他に、学会発表、他大学との研究交流会など様々な活動を行っています。本学での研究活動は、

機器も揃っており、高度な研究活動を行うことのできる環境にあります。研究活動を通して、研究を計画、実行し、評価する能力、問題解決能力を身につけることができます。大学院では、これらを論理的に考え研究を行っていくので、大学4年間で学んだことからさらに高度な能力を身につけることができます。このことはすなわち、仕事を行う上でも必要な能力となってくるので重要です。研究は研究室内で協力しあって進めていきますので本学のテーマのひとつであるコミュニケーション能力や連携能力を培うこともできました。

一方、学会発表や、研究交流会では、自分の研究発表を行うだけでなく、他の研究者の研究内容を聞くことができ、研究への幅が広がります。学外の研究者の方々と交流できる場面は非常に貴重です。研究に対する意見を交換するなかで交流を深めることができます。ゼミ内だけでなく、学外の人と話をする時は、自分の研究をいかにわかりやすく伝えるか、また質問に対してどう論理的に答えるかなどのプレゼンテーション能力が必要なので、非常に勉強になりました。

以上が研究紹介です。興味のある方はぜひ見学にいらして下さい。川中ゼミ一同お待ちしております。

問い合わせ先
kawanaka@nuhw.ac.jp



平成20年度「総合ゼミ」発表会報告

本学では教育特色のひとつでもある「連携教育」の総まとめとして、4年次のカリキュラムで「総合ゼミ」という科目を開講しています。総合ゼミでは学科混成の少人数グループを編成し、他学科の学生と実習での経験および各分野の専門性にに基づき具体的な支援策について検討していくことで、専門職間連携を実践的に学ぶことを目的としています。

今年は9月26日金に総合ゼミ発表会を行いましたので、全グループでの取り組みの様子を紹介と、「脳血管障害の在宅支援」の検討を行ったグループについては、広島県尾道市医師会とインターネットで結び発表を行いましたので、クローズアップしてその詳細をご紹介します。

高齢者の糖尿病【渡邊・中山ゼミ】

糖尿病患者数は年々増加の一途をたどり、また罹病年数の長い症例の増加に伴い、重症合併症も増加しています。合併症は糖尿病をもつ患者自身の生活を脅かすのみならず、家族にも多大の負担を強いることとなります。そして医療経済的にも医療費の増大をもたらす要因となっております。今回取り上げた疾患モデルは、私の自験例を基にケースレポートを提示し、理学療法学科、健康栄養学科、健康スポーツ学科、社会福祉学科での共通認識の下、4学科協働作業による合併症発症および予防対策と医療経済の貢献にどのような支援策必要か、毎日の学習においてスクリーニングツールの体系的立案ができるコア育成を目的に取り上げました。

学習目標は大きく2項目に分け、ワークショップIでは、①症例から観察すること、②症例からの情報収集、③各学科間のコンタクト、④医療記録からの問題点を入手可能なデータを列記し、ワークショップIIでは、①患者との接触、②患者家族との接触、③各専門職が考えた最善の支援策、④連携協働による支援策の立案を行いました。スクリーニング作業の中で参加した学生は、この立案で多職種業務を解釈するためのスキルアップと学科間共通の認識の必要性を今回の総合ゼミから習得したと感じました。



小脳梗塞男性の家庭・社会への参加支援【貝淵・遠藤・渡辺ゼミ】

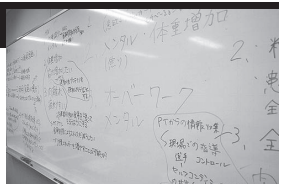
本グループは、理学療法学科・作業療法学科・言語聴覚学科・健康栄養学科・社会福祉学科の5学科でゼミを行いました。取り組みのひとつとしてまずは小脳梗塞のクライアントの評価風景をビデオ撮影したものを、学生全員で見ました。学生は、専門領域ごとに、評価結果をまとめ、他学科に説明します。理学療法学科の学生が「歩容が。。。」と説明すると、他学科の学生が「歩容って?」という質問があり、そうすると当科の学生は「歩容というのは、、」という様に、専門用語の説明からしなければならぬ時間だったと思います。また、「身障手帳1級というのは・・・」と、社会福祉学科の学生が説明する場面もありました。他学科の評価の仕方を見ることができ、大変よかったと学生からは好評でした。その後、2グループにて熱く議論・討論し、できあがったアプローチはそれぞれ特徴があり、同じ評価でも、その後の医療従事者のアプローチ方法で予後がかなり違うことを実感できたと思います。

普段、使っている専門用語の説明から始まり、各専門職のクライアントの捉え方、整理の仕方、アプローチ方法など、学習することは多かったが、そのように専門職が一体となり、クライアントを中心に考えるんだと概念は染み付いたと思います。



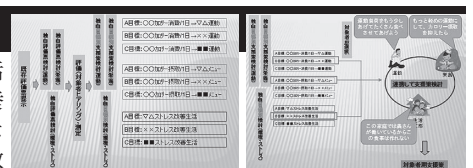
アスリートのスポーツ外傷のサポート【柵木ゼミ】

本グループは、実際に膝前十字靭帯断裂の経験のあるサッカー選手に担当教員がインタビューをし、その会話の中にある競技復帰に至るまでの様々な問題点を理学療法学科、健康栄養学科、健康スポーツ学科の学生がそれぞれの立場から考え、互いに協力しながら、この選手競技復帰するための支援プログラムを立案するというものでした。「連携」を「専門職同士が情報交換しながら協力しあうこと」と解釈し、「専門分野を互いに分担する」という単なる分業状態に陥らないように注意しながら討議は進められました。具体的には理学療法学科はADL復帰を目標とするmedical rehabilitationを、健康スポーツ学科は競技復帰を目標とするathletic rehabilitationを、健康栄養学科は受傷直後から復帰後に至る全期間の栄養面でのサポートを担当しましたが、三者が互いに権限を委譲しつつも連絡・相談をしながら、密に協力して選手をピッチに戻すという目標に向かうことができたようです。参加した学生からは、他学科の学生と協力することで問題解決に向けて新しい視点が生まれ、またチーム医療について実践的に学ぶことができた、というようなコメントも寄せられており、ゼミを通して各専門職間で連携して解決することの重要性が認識できたようです。



メタボリック症候群(疑い)の指導【村山・丸田・西原ゼミ】

このゼミでは、「メタボリックシンドローム予備軍の対象者」に実際の行動変容を前提として、生活改善プランの立案を行ないました。理学療法学科と健康スポーツ学科は運動指導の側面、健康栄養学科は栄養教育の側面、社会福祉学科は生活支援の側面からそれぞれの専門性を理解・認識しながら、連携して進めました(図参照)。また、対象者は、メタボリックシンドローム予備軍である本学教員(自ら手を挙げてくれた教員)であり、体組成評価、血液検査結果、家族構成やライフスタイルなどの実際の相談者情報をもとにして、生活改善プランを作成しました。本学教員として多忙な日々を送られているため、現在の生活に負担とならない、無理のないプランが完成しました。課題として、各職種の専門性(用語、知識、認識)の理解が難しいようでしたが、他職種の用語、知識、認識がわからない中で、どうやって他職種を理解していくのか、またどうやって他職種にわかりやすく自らの職種を理解してもらう工夫をするのかといった連携の力量が試される場となったようです。



重度脳性まひ児に対するチーム・アプローチ【押木・永井ゼミ】

このゼミでは、15歳のM君(知的障害を伴う脳性まひ:重度アテトーゼ型四肢麻痺)の家庭での療育について各専門職の立場から考え、具体的に改善できるプランを作成することを目的としました。方法は、実際に対象者の自宅を訪問して現在の生活の様子や将来の希望を保護者に伺い、評価・観察を行った後、大学にて必要な資料を収集し、ディスカッションを重ねてプランをまとめました。

学生は理学療法学科(P.T)、作業療法学科(O.T)、言語聴覚学科(S.T)、健康栄養学科(H.N)、社会福祉学科(S.W)で構成され、1グループ8名×2班でゼミ活動が行われました。P.Tは今後の機能変化をふまえた治療と支援、O.Tは遊びとADL改善、S.Tはコミュニケーションと嚥下機能、H.Nは栄養面の評価と管理、S.Wは養護学校卒業後の生活支援について、他学科の作業との互換性も考慮しつつまとめました。また、保護者に対して、結果の報告も行いました。学生たちは初めて出会う重複重度障害児に緊張ながらも連帯感を持ち、活発でいい雰囲気での学習が進められました。

協力してくれたM君の母親から、次のような感想が寄せられました。「Mが生まれてから15年間の日々生活は本当に忙しく、過去を振り返ることがなかったのですが、この機会に現在までの経過を整理することができました。母親として偏ったモノサシでMを見ていた面も判り、反省したり可能性を感じたりと本当に良い時間でした。」

学生もM君の家族もM君の理解に深度が増し、専門職間、専門職—患者間の連携がM君のQOLを高めるという可能性を実感できたようです。



脳血管障害の在宅支援 (眞柄・星野ゼミ)

今回の総合ゼミで、地域ケアを想定したリハビリテーション医療を検討したグループの発表については、地域での包括的な医療ケアシステム構築に、全国でも率先して取り組んでいる広島県尾道市の医師会とインターネットで結び、現場の医師からより現実的な指摘やアドバイスをいただくことができました。このeラーニングシステムの活用は今後の医療現場においても期待されていることから、この体験は学生にとって大変貴重な機会となりました。



インターネットを利用した連携演習

義肢装具自立支援学科教授 眞柄 彰

本学は3学部8学科の保健医療福祉に関連した専門職を養成しています。これほど多職種を目指す学生がひとつのキャンパスで一緒に学んでいる大学は全国でも少数です。わたしはリハビリ科医師として病院で30年間リハチームの運営をしてきました。患者さんが家庭復帰するときには地域の医療福祉関係職種と協力して準備します。重度な障害を持っている場合は、病院内の多くの診療科医師、看護師や医療関連職が真剣に協働することで以前のようなしあわせな家庭生活を再開できるのです。

本学では4年間にわたってリハビリなどの勉強をするわけですが、その総仕上げとして「総合ゼミ」というチーム連携の練習をおこないます。7~8名の異なる専門の学生がチームをつくり、ファシリテータというゼミのまとめ役となる教員がいっしょに作業をはじめます。

このグループの場合はまず事例にもとづいて作成した「重度脳卒中四肢麻痺患者さんの地域家庭復帰」を題材にしました。わかりやすくパワーポイントで3日間をかけて3段階にわけて説明します。医学用語も出てきますので、内容によってはよくわかる学科生と聞いたことのない学科生がいるわけです。もし自分が理学療法学科生なら次の日には理学療法士が専門とする内容を調べてきてグループ全員の前でパワーポイントを用いて説明しま

す。教員が補足することもあります。そしてチームはひとつの机に集合します。各専門からみて、患者さんが無事に家庭復帰して家で生き甲斐をもって生活するにはどうすればいいのかアイデアを提起します。解決が必要な問題点を重要な順からならべて、どうすれば障害を抱えながらうまく家庭で生活できるか、作戦をねります。最終的に解決計画を作成して皆の前で発表しました。

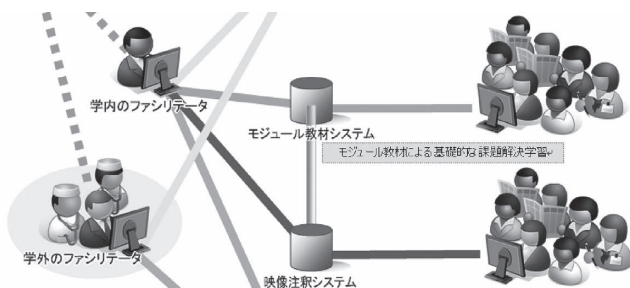
今年はあらたな試みとして発表はインターネットを通じて広島県尾道市の医師会長さんに参加して頂きました。尾道市医師会は保健医療福祉関連職種が協力体制を構築していることで全国でも有名だからです。医師会長さんからはあたかもこちらの学生がプロの専門職であるかのように貴重な指導助言をしていただきました。学生達は本当に熱心に、また苦労しながらこの症例の復帰について考えましたので、助言を聞いて感激していました。また、教員は「4年間リハビリの勉強をしてきたら、最後に仕上げとして連携の演習ゼミをやらなければいけない」と確信しました。日本全国でも同様な試みがはじまっています。



発表会に向け話し合いを重ねる学生達



尾道市片山医師会長のコメントの様子



参加学生からのコメント

▶4年間各専門分野で学んだ事を、他学科の人に伝える事の意義や難しさを改めて感じることに同時に、他職種に対する見方が広がり、以前より理解が深まりました。(言語聴覚学科学生)

▶休日も学校に集まりケースを検討い大変でしたが、達成感は大きかったです。また、eラーニングを通じて学外の先生からコメントをいただくことで、自分達のプランに足りない部分がより明確になったと感じ、他職種との連携の重要性を強く感じました。(作業療法学科学生)

▶総合ゼミでは今までにない知識がたくさんつくので、将来的にもとても為になると思いました。特に社会福祉学科は他学科と比べると医学的な知識が浅いので、いい勉強になりました。またゼミを通じて、他の領域とどのように連携していけばよいのかもすぐよくわかり、連携の中で社会福祉士がどのような役割をすればよいかがあらためて実感できました。(社会福祉学科学生)

▶4年生になると他学科との交流が減ってしまうので、総合ゼミはとても良い機会でした。また1年生のころと違い、専門知識を身に付けたからこそ話せることや教えてもらえることがたくさんありました。(健康栄養学科学生)

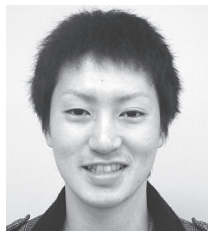
学外実習を終えて

理学療法学科

私は、石川県の金沢西病院で10週間の臨床実習をさせて頂きました。その中で、患者様の退院前には自宅訪問し、実際に家庭での生活の様子を評価して今後の理学療法プログラムに反映させるなど、自宅復帰へ向けた過程を学ぶことができました。また、転倒予防教室や糖尿病教室、水治療法教室などにも参加させて頂き、地域における理学療法士としての関わり方も学ばせて頂きました。病院での理学療法は、患者様の状態に合わせて病棟スタッフとの連携や環境調整が必要とされおり、実習では実際に患者様を担当させて頂く中でそれらの重要性を改めて感じました。

実際の現場での臨床実習は大学生活で一番苦勞する科目でしたが、実習指導者の温かいアドバイスやスタッフの先生方の励まし、患者様の協力の中で理学療法をさせて頂き、毎日やりがいや面白さを感じ、大変充実した日々を送ることができました。

私は臨床実習を通して、患者様の機能回復を図るには患者様の身体の状態やニーズに対する適切なアプローチの重要性を感じたとともに、理学療法士として、常に患者様を「温かく見守る」という気持ちが必要だと学ばせて頂きました。私は臨床実習で感じた気持ちを忘れずに、患者様には温かい理学療法を提供していきたいと思っています。



理学療法学科4年
戸田直智

4ヶ月の総合臨床実習を終えて

作業療法学科

私は今回、身体障害領域と高齢領域での実習を各8週間行ってきました。前者の実習では、3年次の評価実習でも同様の領域での実習を行っていたのですが、実際の患者様を目の前にしてしまうと、自分らしさをうまく表に出すことができず、どうしたらよいか毎日悩んでいました。また、知識も不足していたため、実習指導の先生方や患者様にも迷惑をかけてしまったことが多々ありました。しかし、そんな苦勞をしていた時に励ましてくれたのは患者様でした。患者様の立場に立ち、もっと視点を変えていかなければならないということを知り、その他、患者様の評価に対しても今までなら障害の面だけしか見えていなかった所が、少しずつ生活面を考えていくことへの重要性を深く学ぶことができました。後者の高齢領域での実習は、初めての実習の為、介護保険制度や、患者様とのコミュニケーション・行動の取り方について考えさせられました。今後の患者様の生活を、いかに楽しみ・充実した上でQOLの向上をどうやって行っていくか、という場面での作業療法プログラム立案では苦勞しましたが、患者様の機能が少しずつ向上していった時の「笑顔」は何物にも変え難いものであり、辛いことも忘れてしまうくらいでした。

臨床実習は、机上の勉強だけでは学べない、目の前にいる患者様について様々な視点から考えさせられる実習であり、自分を大きく成長させてくれる実習でした。



作業療法学科4年
杉山博紀

実習だから得られた言葉

言語聴覚学科



今回、私は横浜旭中央総合病院にて3週間の評価実習をさせていただきました。教科書通りの患者さんは少なく、観察から全体像を捉え診断すること、症状によって接し方を変えていかななくてはいけないことを学びました。患者さんの訴えやご家族の涙を見たとき、病気によって生じた不安や葛藤を共に向き合っていかななくてはいけないと思い、心理面をサポートすることは訓練と同様に臨床の中での中核を示していることに気がきました。また他部門の先生方と話していると、患者さんの身体状態や言語室では見られない様子を聞いたり、逆に言語訓練の様子を伝えることで情報交換をすることができ、多様なアプローチの仕方を考え工夫することができました。一人の患者さんの回復過程には様々な部門が関連するため、他職種との連携の重要性を肌で感じました。

短い期間でしたがすばらしい環境の中で学ぶことができました。実習中にバイザーの先生が「患者さんは先生です」とおっしゃった言葉が今でも忘れられません。患者さんから教えられることは多々あり、その言葉の深さを身をもって知ることができました。

今回の実習を通してさらに知識を養いたいと思うのと同時に、以前よりも増して言語聴覚士になりたいと感じています。学習したことや経験したことをもう一度勉強し、四年次の総合実習でも活かしていきたいと思っています。

言語聴覚学科3年
土佐香織

目標を見つけた学外実習

義肢装具自立支援学科

今回の臨床実習Iでは、義肢装具製作所や医療・福祉施設、福祉用具・福祉機器関連施設、またユーザー宅を訪問しての“見学実習”を行ってきました。実習先では義肢装具士の日常業務や関連職種の役割や連携、またユーザー宅では私たちの製作する義肢装具や福祉機器・福祉用具がどのように使われ、役に立っているのかを学ぶことができました。今回実際に自分の目で見学してきたことにより、今まで漠然としかイメージできなかった施設環境や業務内容、実際に使われている福祉用具や住環境などをより明確にイメージすることができ、将来自分がどのように人の役に立てるのかを知ることができました。

私たち義肢装具士の仕事は“ものづくり”です。私自身、1年次までのイメージでは、常に義肢や装具に向き合い、より良いものを製作すればよいとばかり思っていました。しかし今回の実習を通して、それが間違いだったことに気が付きました。確かに私たちの仕事は“ものづくり”ですが、そこには人と人との出会いがあり、何度もコミュニケーションを交わし、信頼関係を深め、対象者の方を思いやり、その方のことをよく観察ししっかりと理解できて、初めて義肢装具や福祉機器が提供できるのです。これから義肢装具や福祉機器の知識や技術にとどまらず、コミュニケーション能力もしっかりと身に付け、人と人との係りを大切にできる義肢装具士になりたいと思いました。



義肢装具自立支援学科2年
郷 貴博

栄養教育実習を終えて

健康栄養学科

私は、新潟市立東中野山小学校で2週間の栄養教育実習をさせていただきました。担当学年は6年生で、児童と学校生活を共にする中で私自身とてもパワーをもらい、とても楽しい実習を送ることが出来ました。

実習では、日々の授業観察に加えて食に関する授業をさせていただいたのですが、担当授業を通し、児童の食生活や食知識などの実態を知ると同時に、実際に指導することの難しさを痛感しました。また、学年・学級の実態を踏まえた上で、授業展開や使用媒体に変化をつけることにも苦労しました。食育は給食からの切り口だけにとらわれず、児童の興味を引くような、全く異なった視点から入り込むことの重要性を、身をもって学ぶことが出来ましたし、実際の授業では私の予想を超えた児童の反応をもらい、私が教えるばかりでなく、児童から多くのことを教わりました。

本実習において、児童との触れ合いや現場での教員の方々の様子を拝見する中で、栄養教諭は専門的な能力とあわせて、児童と真剣に向き合うことや信頼関係を築くことといった教員としての資質を兼ね備える必要があると感じました。そして、栄養教諭に魅力とやりがいを感じ、目指したいという気持ちがより強くなりました。今後、自分自身のスキルアップを図って豊かな人間性を養い、私と一緒に食育をやってみたいと思っていただけるような栄養教諭になりたいと考えています。



健康栄養学科4年
丸山 真菜美

教育実習を終えて

健康スポーツ学科

今年の5月、兵庫県の母校に戻り、3週間の教育実習を行いました。授業観察、実習授業の経験、部活動への参加、生徒との交流など、大変忙しく、かつ充実した3週間でした。

これまで大学で様々な知識や理論を学び身に付けてきましたが、今回の実習では、学んだことを活かして実践することの大切さを感じました。「わかること(理解)」だけでは不十分であり、「わかること(理解)」と「できること(実践)」の両方ができて初めて本当の意味で「自分のものになる」ということです。「できる」までには多くの反省点を克服しなければならず、指導することの難しさと同時に奥深さも感じることができました。そのひとつの例として、体育祭の準備で250人の全校生徒の集団行動を指導する機会がありましたが、生徒全体の動きを把握し、掛け声のタイミングを計り、適切な指示を出していくことは本当に難しいことでした。そして、今までとは違った角度から学校や教師を観察することができ、教育の重要性を再認識しました。それは「教育」というものは「生徒と教師の信頼関係の上に成り立つ」ということです。

今回の実習は、自分に今何が必要か、これからどんなことをしていけばいいか深く考えることができた点で、大変貴重な経験でした。この経験を存分に生かし、もっと大きな視野を身につけて社会で活躍していきたいと思っています。



健康スポーツ学科4年
夏原 隆之

地域看護学実習Iを終えて

看護学科

今回私は、見附市保健福祉センターで2週間実習させていただきました。見附市が行っているさまざまな保健事業に参加させていただき、実際の保健師の役割や他職種との連携の大切さを学ぶことができました。地域から情報を得るには、保健師と住民の方々との普段からの繋がりが大切であることがわかりました。積極的に家庭訪問したり、保健事業に出向いたりすることで、住民の方々の信頼関係を築いていくことができます。また、地域で生活している方には、治療が必要になる前に予防していくことが必要です。様々な視点から住民の方々の健康状態や生活状況をアセスメントすることで、健康問題の潜在的リスクを考えることができ、問題がある場合でも早期に見つけ出すことができます。このように、保健師には沢山の人の対象としている中で、ハイリスクの人を見つけ出す能力が重要であると感じました。また、よりよい支援をするためには、得た情報をどんな職種に繋げていけばいいのか考えていくことも必要で、それには、他職種の専門性を理解していることが重要であると感じました。

今回の実習を通して、保健師という仕事のやりがいや魅力に気づけることができ、大変充実した日々となりました。将来、保健師として住民の方々と接する機会がある時は、まず相手の声をよく聞き、その方に合った方法で支援していきえるようになりたいです。そして地域の方々がいきいきと暮らせる町にしていきたいです。



看護学科3年
中島 歩

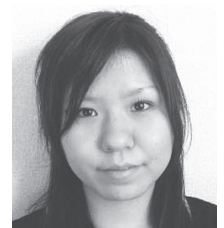
重症児の方への支援を通して

社会福祉学科

私は約1ヶ月間、重症心身障害児施設の長岡療育園で実習させていただきました。重症心身障害児・者の方と関わることは初めてで、コミュニケーションを取れる方が少なく、最初は戸惑うことばかりでした。しかし関わっていくうちに利用者さんに笑顔になって頂けることがとても嬉しく、関わることの楽しさを知ることができました。

印象に残っていることは、ある方の個別支援計画を立てさせて頂き、実施できたことです。その方は自閉傾向があり、人と関わるのが苦手で、初めのうちは上手く接することができませんでした。しかし一緒に散歩に出かけるなど1対1の活動をしていくうちに、私を見ると笑顔を見せてくれるようになりました。この方の支援をさせていただいたことにより、自閉傾向の方との関わりかたや、重症児の方との個別の関わり方の大切さを学ぶことができ、とても良い経験となりました。

今回の実習を通してさまざまな障害を抱えた方と接することができ、自分に足りないところを見つけ、視野を広げることができました。今までは将来、障害を持った方の支援をしていきたいと漠然と考えていましたが、この実習を通して重症児・者の方が入所している施設で働きたいと思うようになり、とても有意義な実習になったと思います。この目標が達成できるよう、今後ボランティア活動にも積極的に参加していきたいです。



社会福祉学科3年
目黒 景子

世界へ羽ばたく選手を育成する 強化クラブ紹介

本学では、サッカー・バスケットボール・水泳・駅伝の4競技・種目を強化クラブ指定し、トップアスリートの育成を目標に競技力の向上と、人間性の向上を目指し日々トレーニングに励んでいます。今回はその各強化クラブの最近の活躍についてご紹介します。

サッカー部 (男子チーム・女子部員) いよいよ戦いのステージは全国へ。インカレ初出場!

平成17年度創部の男子チームは、多くの方に支えていただき、1戦1戦勝利に向けて試みた結果、1年目で北信越大学リーグ2部優勝1部昇格、平成18年度同1部リーグ3位、平成19年度準優勝と、「北信越大学リーグ1部」を定着することが出来ました。創部4年目の全学年が揃った本年度は、「インカレ出場!」をチームの目標に掲げて練習に取り組み、その結果同リーグにおいて念願の初優勝を果たし、「第57回全日本大学サッカー選手権大会(通称インカレ)」に北信越代表として出場することとなりました。インカレ1回戦では日本大学サッカー界屈指の強豪筑波大学と対戦します。本学サッカー部としての新たな試みが始まりますが、北信越地域代表校としての名に恥じぬよう全力でプレーしてまいりますので、今後ともご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

女子部員は、波佐谷灯子・川村優理がアルビレックス新潟レディースの一員として、多くのサポーターと共になでしこリーグ1部で戦っております。応援

よろしくお願いいたします。



2008年主な戦歴

総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント北信越大会	準優勝	
新潟県大学・高専連盟春季リーグ戦	優勝	
HFL北信越フットボールリーグ2部	3位	
北信越大学サッカーリーグ	優勝	第57回全日本大学サッカー選手権大会出場
ブレナスなでしこリーグ2008 ディビジョン1	7位	アルビレックス新潟レディース所属

男女バスケットボール部 女子3年連続、男子初出場。ついにインカレ・アベック出場

男女バスケットボール部は発足当初から県内外のバスケットボールファン、関係者に注目されながら各種大会で上位入賞してきました。今年度は女子バスケットボール部が北信越学生バスケットボール選手権大会兼インカレ予選で2年連続優勝・3年連続3回目のインカレ出場。また北信越総合バスケットボール選手権大会でも優勝。全日本総合バスケットボール選手権大会(オールジャパン)に北信越代表として出場することとなりました。このことで名実ともに「新潟県、北信越ナンバーワンチーム」に成長できたと思っています。男子も北信越バスケットボール選手権大会兼インカレ予選で接戦・激戦を制して念願の初優勝を成し遂げました。今年も男女とも県内外から強力な新戦力となる1年生が入学し、練習内容もさらにレベルアップ。その練習に耐え努力した結果が今回の男女アベックでのインカレ出場だと思えます。今後更なる上をめざし、練習に励み頑張っていきたいと思っています。最後に男女バスケットボール部のために保護者の皆様方・大学関係者からの多くのご声援をいただき、この場を借りて御礼申し上げます。



2008年主な戦歴

男子	北信越学生春季リーグ3部	優勝	(2部昇格)
	甲信越学生バスケットボール選手権大会	優勝	(初優勝)
	新潟県バスケットボール選手権大会兼全日本総合県予選会	3位	
	北信越学生バスケットボール選手権大会	優勝	(初優勝)
	北信越学生春季リーグ1部	優勝	(初優勝)
女子	西日本学生バスケットボール選手権大会	ベスト8	
	新潟県バスケットボール選手権大会兼全日本総合県予選会	優勝	
	北信越総合選手権大会兼日本総合北信越予選会	優勝	(初優勝)
	北信越学生バスケットボール選手権大会	優勝	(2年連続)

水泳部

創部4年目にして、日本代表輩出



生たちの若い戦力も大きな活躍を見せてくれ、総合で3位を獲得しました。着実に総合力が付いてきたと実感しております。個人では、澤田涼が日本選手権やインカレなど全日本クラスの大会で入賞を果たし、2008年イギリスで

開催された「短水路世界選手権」に日本代表として選出される快挙を成し遂げるなど、ステップアップを遂げることができました。今年度も「認めあい、支えあい、競いあうチーム」「多くの人から応援されるチーム」という2つのスローガンを掲げ、日々精進していきたく思います。また、日々の活動報告を以下で紹介しています。

http://nuhw.blog-niigata.net/swim/

2008年主な戦歴

短水路世界選手権	日本代表選出	澤田涼
短水路世界選手権 800m自由形	11位	澤田涼
短水路世界選手権 400mメドレーリレー	8位	日本代表チーム(澤田涼 出場)
関東学生選手権 女子1部	総合2位	
関東学生選手権 男子2部	総合3位	
国民体育大会(新潟県代表) 200mリレー	8位	駒形進

陸上競技部 (駅伝チーム)

念願の全日本インカレ入賞!



陸上競技部は健康スポーツ学科が創設された4年前から本格的なトレーニングを開始し、4年目にして全日本インカレで入賞する選手を出すほどに成長しました。本陸上競技部の特性は、個々人の目標を目指して頑張るだけでなく、指導者となって選手を指導できる理論と実践力を身につけることを目標にしています。この目標達成のために選手の個性に合った指

導に心がけています。陸上競技部の指導スタッフは部長に丸田秋男、監督・コーチに山地啓司(中・長距離)、コーチ山崎史恵(短距離・跳躍等)、アシスタント・コーチに瀧澤一騎(中・長距離)と高橋和将(短距離・投てき)の両氏が加わり、総勢5人です。この他、外部団体として新潟アルビレックスランニングクラブと連携協力を行っています。

2008年主な戦歴

日本学生陸上競技対抗選手権大会 3000m障害	5位	牧 良輔(4年)
北信越学生ロードレース大会兼全日本大学駅伝大会予選会	団体: 3位	
北信越学生ロードレース大会兼全日本大学駅伝大会予選会	個人: 優勝	牧 良輔(4年)
北信越学生ロードレース大会兼全日本大学駅伝大会予選会	個人: 11位	中澤 翔(3年)
北信越学生ロードレース大会兼全日本大学駅伝大会予選会	個人: 12位	牛木陽一(1年)
出雲全日本大学選抜駅伝競走	北信越選抜	選出(牧 良輔)

村山伸子教授ら研究グループ協力によるコンビニ弁当が発売！

11月28日(金)～12月15日(月)の期間、新潟県内のセブン-イレブン全店舗にて「うまさぎっしり新潟の味弁当(豚コース味噌焼)」が販売されました。

これは新潟県と株式会社セブン-イレブン・ジャパンが締結した「地域活性化包括連携協定」に基づき開催された「うまさぎっしり新潟フェア第2弾」の目玉商品として販売される健康体験型のお弁当で、商品開発には本学健康科学部健康栄養学科および大学院の村山伸子教授ら研究グループが協力し商品化されたものです。

村山教授は、中食(弁当)を通して勤労世代の健康づくりに貢献できないものかと、平成18年に「弁当革命」プロジェクトをスタート。大学院生の長谷川美代さん(管理栄養士)とともに「おいしい、健康、地元産」に徹底的にこだ

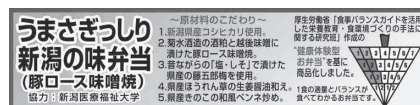
わった「健康体験型弁当」として36種類のメニューを開発しました。

その後、食品業界から市販化したいとの声を受け、給食や弁当業者向けに「弁当革命-味にうるさい新潟人が大満足した『健康体験型』お弁当」というレシピ集を発刊しています。

今回、新潟県内のセブン-イレブン全店舗にて販売されるお弁当の開発にあたっては、こうした弁当革命プロジェクトでの研究成果をもとに、量と素材のバランスを厚生労働省「食事バランスガイド」に沿ったものとしながら、食材は新潟県産にこだわり、かつおいしさも追及したお弁当となっています。

村山教授は、これを機会にコンビニやスーパーで販売されるお弁当に、おいしく、健康的で、地元産の食材を使ったお弁当が増えるこ

とを願っているとコメントしています。



連携教育国際ミニシンポジウム開催報告

12月1日(月)に連携教育の第一人者であるヘレナ・ロウ先生を迎え、本学の特色のひとつでもある連携教育についての理解を深める目的で、教員対象の連携教育国際ミニシンポジウムを開催しました。

シンポジウムでは、本学における連携教育の現状と次年度以降のカリキュラムについて、担当教員より発表があり、最後に特別講演としてロウ先生に講演していただきました。

ロウ先生は、イギリスでの連携教育を推進している団体CAIPE (Center for

the Advancement of Interprofessional Education) の副代表であり、イギリスの連携教育の指導者的立場として、日本を含め世界各地で講演や研修を行っている連携教育の第一人者です。

ロウ先生は講演で、協同学習の必要性と連携学習をファシリテート(促進)するための原理について焦点をあてお話をされました。他職種との連携には協同学習が重要な鍵であり、連携教育の指導者は、それぞれの職種の特有の学習スタイル、考え方、力関係の捉え方を認

識したうえで、協同学習を促進するための技能を身につけなければならない、と本学教員に向けて強調しました。

講演は、ロウ先生が教員の反応に常に配慮しながら終始和やかな雰囲気が進められ、教員からも活発な意見や質問が出されるなど、大変実りのある有意義なシンポジウムとなりました。

本学では今後も連携教育推進のため、様々な取り組みを行っていく予定です。



保護者会開催報告

11月8日(土)、平成20年度保護者会が本学キャンパスにて開催されました。

保護者会は、本学学生1年生から4年生全ての保護者の皆様に対象に実施され、保護者の皆様に教育方針や指導体制及び学生の修学状況、生活状況、就職活動状況などを説明し、本学の取組を理解してもらうとともに、懇談会・個人面談等を通して情報交換を図り、今後の学生の教育に資することを目的として例年開催されます。

当日は、410名の多数の保護者の方々が出席され、会場は終日熱気に溢れ、充実した保

護者会となりました。

午前は、学長から本学における学生教育の重点的な取り組み状況についての全体説明が行われた後、各専門の先生方から具体的な取り組み状況について発表が行われました。

午後の学科別プログラムは、各学科ともおおむね教職員側から学科の取組状況を説明した後、懇談会が行われ、その後個人面談という順序で進められました。いずれの学科も学生の生活に関する内容を中心に率直な意見が交わされました。

今回の保護者会では、保護者の皆様の教育

への熱意が強く感じられるとともに、大学として保護者・大学との連携の重要性を改めて認識させられた会でした。

本学では保護者会の際のアンケート等いただいたご要望・ご意見をよく検討し、今後の本学の教育に十分反映してまいりたいと考えております。



学友会

第8回伍桃祭報告

今年の伍桃祭のテーマである、「未来」～考えよう、私たちの未来・地球の未来～には、伍桃祭を通じて本学の学生や先生のみならず、地域の方々にも自身の未来、そして地球の未来について、一人ひとりが考えるきっかけになってほしいという願いが込められています。そこでこのテーマをもとにエコを意識した伍桃祭を企画しました。

エコ企画として、今年から新たにエコ容器の使用やフリーマーケット、マイ箸運動等を企画しました。またゴミの分別を昨年より細かくし、エコを意識してもらおうと取り組みました。伍桃祭を通じてエコについて少しでも考える機会が一人ひとりに持てたなら、テーマに込めた願いは達成できたのではないかと思います。今年



がエコを考える第1歩となり来年以降、エコについての意識がもっと大きくなってほしいと思います。

また、昨年にはなかった地域交流の一つとして、光晴中学校吹奏楽部とジュニアマーチングバンドとよさかの方たちに演奏をしていただきました。どちらの演奏も素晴らしく、今まで以上に地域の方との交流の機会を持つことができました。また今年初の新しいイベントとして、学科対抗パフォーマンス大会というイベントを企画しました。8学科それぞれのパフォーマンスはどれも素晴らしく、非常に大きな盛り上がりを見せました。多くの来場者の方に楽しんでもらえたと思います。

伍桃祭当日は予想していたよりも多くの方に足を運んでいただき、大成功で終わることができました。無事伍桃祭を終えることができたのも、学生や教職員の方々をはじめ、地域の方々や企業の方々など、多くの方にご協力をしていただいたおかげだと思っています。多くの人に支えられ、伍桃祭に関わった全員でつくり上げた伍桃祭だったと思います。本当にありがとうございました。

第8回伍桃祭実行委員長 中川拓也

同窓会

同窓会総会／首都圏支部総会開催の報告

この度、第4回新潟医療福祉大学同窓会総会が10月25日(土)に開催されました。今回中心となった議題は、「卒業生のネットワーク化と、本学と会員との生涯パートナーシップの構築」についてでした。また、それに伴い事務局内に設置した「同窓会支援室」についてでした。本会の会員は、1期生が卒業した平成17年から20年度現在までで1200名を超え、10年後の27年には5000名を超える大きな組織となります。今後、会員相互の連携を図るためには、ネットワーク化が不可欠です。そのためにはまず、本会と大学との連携が必要と考え、このような議題を挙げました。今後はより充実した事業を行いたいと思っております。ご期待いただければと思います。

また、第2回首都圏支部総会が11月24日(月)に東京キャンパスで開催されました。今年度は、高橋学長より「卒業生と母校との今後のかかりについて」のご講演、同窓会支援室から大学の近況報告を、映像を交えてお話いただくなど、盛りだくさんな内容となりました。昨年同様、ご参加いただいた会員の方からも、職場での他職種との連携の現状をお聞きし、有意義な会となりました。

来年度は、会員のみなさんがよく知っている懐かしい先生方をお呼びし、食事をしながらの情報交換などを考えております。役員一同お待ちしております。



受験生のみなさんへ

イベント案内

■キャンパスツアー 3月28日(土)

新3年生に向けて、本学「大学概要説明」「入試概要説明」はもちろん、「施設見学」や「個別相談」「全学科を全て体験できるコーナー」など様々なプログラムを用意しています。また、保健・医療・福祉分野の仕事内容や資格、養成校の最新情報、大学と専門学校の違いなど、みなさんの進路選択に役立つ情報満載のプログラムを計画しています。



入試案内

■一般入学選考試験(前期日程・後期日程)

- 「第2志願制度」でさらに入学へのチャンスが広がります!
※理学療法学科、看護学科を第2志願とすることはできません。
- 前期日程では全国6都市に試験会場を設置!後期日程は新潟以外に東京会場もあり。(前期日程会場:新潟・東京・郡山・長野・高崎・富山)
- センター試験利用入試との併願も可能!
- 一般前期での成績優秀者は「特待生制度」により1年次の授業料全額無料!

■募集人員

学 科	前期	後期
理学療法学科	33名	4名
作業療法学科	17名	2名
言語聴覚学科	15名	2名
義肢装具自立支援学科	14名	2名
健康栄養学科	15名	2名
健康スポーツ学科	25名	3名
看護学科	32名	3名
社会福祉学科	35名	3名

■入学選考試験日程

入試区分	出願期間	試験日
一般前期	1/7(水)～1/23(金)	2/2(月)
一般後期	2/9(月)～2/20(金)	3/1(日)

※大学入試センター試験利用入試(前期日程・後期日程)も実施します。入試詳細につきましては入試事務室(☎025-257-4459)までお問い合わせください。



新潟医療福祉大学

〒950-3198 新潟市北区島見町 1398 番地 TEL025-257-4455 (代) FAX025-257-4456

URL <http://www.nuhw.ac.jp/> 携帯サイト <http://www.nuhw.jp/m/>

【入試事務室】TEL025-257-4459 E-mail nyuusi@nuhw.ac.jp



誌名「QOLサポーター新潟」の由来 世界一の長寿国となった我が国では、「いのちの長さ」を伸ばすことと同様に、「生活の質、Quality of Life、QOL」を豊かにすることが、益々重要になっております。新潟医療福祉大学では障害者、高齢者などのQOLを高くすることを支援する(サポーター)人材を育成します。このような人材を「QOLサポーター」と名づけました。そして皆様にも本学の内容、活動をお知らせする広報誌を「QOLサポーター新潟」としました。